

すくすくと 一流れのほとりに植えられた木のように

いかに幸いなことか 神に逆らう者の計らいに従って歩まず 罪ある者の道にとどまらず
傲慢な者と共に座らず 主の教えを愛し その教えを昼も夜も口ずさむ人。
その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び 葉もしおれることが
ない。その人のすることはすべて、繁榮をもたらす。
—詩篇1編1〜3—

部会だより

キリスト教
保育連盟
神奈川部会

2007年12月5日
第112号



『愚かさと無力さの内に』

日本基督教団片瀬教会付属片瀬のぞみ幼稚園

園長 坪内 克浩

神の御前に自分が無力であり愚かであることを認めることは、とても大切なことではないでしょうか。私たちはつい、自分の知恵や強さを生きたる価値基準にしてしまっています。
私自身、特にそのような者であった一人として、受洗前随分躊躇したことを思い出します。このまま本当に洗礼を受けていいのだからかと揺らぎ、キリスト教批判や宗教批判の書物を随分読みました。それらには、成る程共感するところがありました。けれども同時に、信仰とは最後には、理性や知性を飛び越えねばならない、という一

聖句

わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ

コリントの信徒への手紙Ⅱ
12章9節

とも実感しました。結局受洗しなければ分らない。何より、自分が導かれたのは、自分でキリスト教を求めてきたわけではない、偶然とも思える出来事が重なり、教会に導かれ、素晴らしい牧師に出会った。これは考えても分らない。諦めよう。神様が導いてくれたのだ。なぜだか解らないけれども選んでくれたのだ、後はお任せしよう。そういう気持ちで、洗礼に臨んだのです。揺ぎ無い信仰に満ち溢れてという感じではなかったのです。主イエスの復活は信じていました。しかし、クリスマスについて、使徒信条の、「おとめマリアより生まれ」ということは、その時点では半信半疑でした。
信仰とは、神様の前で、自分の弱さをさらけ出し、愚かさをさらけ出し続けること。そして、自分を神様に明け渡して、神様の恵みの力で生きるということ。信仰によって歩み続けるということ。は、その原点を忘れないということとです。つねに神様の前に、自分は無力であり愚かな者であること告白して立ち続けることです。
クリスマスの出来事は、そのことを毎年毎年私たちに思い出させてくれているのではないのでしょうか。神の子は、全く無力な一人の若い女性から生まれました。聖霊によって身籠った、ということ

この世的に言えば、父親が誰だか分らない子として生まれたのです。全ての造り主であられる神が低く低く降ってこられ、まったく無力な赤ん坊として生まれたのです。もし聖霊によって身籠ったなどということが公にされたなら、人々はマリアを愚かな行為をした嘘つきとして罵ったでしょう。それどころか、石打によって死刑にされたでしょう。そのことを受け入れて結婚した許婚のヨセフも、この世的に言えば、なんとお目出度い人でしょうか。自分の子ではない子どもを身籠った女性と結婚するなんて、愚かなことです。しかし、マリアにしても、ヨセフにしても、この愚かとかいえないことを、天使を通して伝えられた神の御心だからこそ、受け入れたのです。神のみ前に愚かな者として徹したのです。自分で事態をどうにかしようとはしませんでした。弱さに徹しました。神の前に自分の力を全て放棄したのです。そういう愚かで無力な者とされること、神の祝福を受けるに相応しいありかただったのです。



新任教師研修会報告

担当 寺田 千栄

今年度、五月十六日、六月二十七日、十一月十四日と三回の新任教師研修会を持ちました。後藤富子先生（望記念幼稚園前園長）をお迎えして、お話を伺いました。また、そのお話をうけて、参加された先生方と懇談の時を持ち、その中で自分の課題や抱負について話し合う時を持つことができました。後藤先生のお話は、具体的な例も入っていて、実際に私たちが目の前にしている子どもたちを思い浮かべながら聞くことが出来ることもあって、懇談の時には、実際にあったこと、課題としてやっていきたいこと、またやってみたことなど、回を追うごとに、深く話し合うことができました。

て、子どもが心底喜び、充実感を持って出来るまで待つ保育者の姿勢を教えていただきました。そして最後の研修では、様々なグループの中での関わりを通して成長する子どもの姿を待ち、適切な言動をもつて補助していく保育者の姿を見せていただきました。トラブルの時等、教師がすぐに解決するのではなく、子どもが自分の心を表現し、どのように対処していくのかを体験させることが、社会性につながるというお話には、改めて保育の重要性を感じました。



参加者の感想には、「表に出ない心の中にも目を向け、一人ひとりに向き合っていきたいと思いましたが。」「生活の過程で育ち、学ぶことが大切という言葉に、今までの保育を考えました。」「一人ひとりの成長を大切にすることは、周りの子どもへの成長にもつながることがわかりました。」等、日頃の保育を見直す良い機会になったという声が多くありました。共に学ぶことができたことを感謝しつつ報告させていただきます。

新任教師に限らず、私たち保育者は目の前のことに追われて、忙しく過ごしてしまいがちです。後藤先生は三回の研修を通して、「待つ」ことの大切さを教えてくださったように思います。一回目は子どもが動くのを待ち、深い理解を持つて見守ること。二回目は段階的である子どもの成長を、その人格を尊重しながら待つこと。身の回りのことでも繰り返し見せ

第一回主任研修会報告 「キリスト教保育に 教育基本法はどう関わるのか」

関西学院大学名誉教授
船本 弘毅先生
場所 みくに幼稚園
参加者 三十一名
主任会担当 國尾 雪

昨年十二月に改訂された教育基本法について、改訂までの歩みや新旧対照表の資料をもとに、いろいろの違いについて学ぶ貴重な時間となった。日本の教育は一八九〇（明治二十三）年の教育勅語に始まり、敗戦後の一九四五（昭和二十）年にアメリカのGHQのもと、キリスト教的人間観に立った旧教育基本法が制定された。その前文には、真理と平和を希求する理想的な人間の育成の根本は、教育の力にまつべきものであり、個性ゆたかな文化の創造をめざすと掲げられている。しかし、戦後半世紀以上経ち、科学の進歩・情報化、国際化、少子高齢化など国の状況が目まぐるしく変化し、犯罪の低年齢化、不登校の問題等教育の根本にさかのぼった改革が求められているというところで、二〇〇〇年より教育基本法改訂の歩みが始められた。そして、幼児教育の重要性に着目し、学校教育のはじめに幼稚園が位置付けられ、家庭教育の大切さを新項として加えた新教育基本法が、二〇〇六年十二月に公布施行されることとなった。

文部科学省からの趣旨説明では、時代の要請に応えた改訂と言われている。十分に審議されないうちに、現行法に改訂されたことに注目し、旧法との違いをしっかりと認識する必要がある。新しく具体的な条項が加えられ、統制が図られており、教育の自由が失われる危険性を孕み（はらみ）、個々の人格形成より、愛国心・公共心が重んじられ、国や社会のための有能な人材育成に結びつく戦前に逆行する恐れを持っていること、さらに憲法九条の存在が脅かされていることなど、我々保育者が、神さまから託された大切な子どもたちの未来を守るため、確かな目で政治を見つめ、協力しあつて共に声を上げ、望みを捨てずに社会に働きかけることの大切さを教えて頂いた。



第四十回 夏期講習会の報告

夏期講習会担当 島田美緒

日時：二〇〇七年八月二十八日
会場：セントジェームス迎賓館
講師：阿部志郎先生

(元横須賀基督教社会館館長
神奈川県立保健福祉大学学長
出席人数：一八七名)

神奈川部会第四十回夏期講習会が行なわれました。部会長の西田先生司式による礼拝が行なわれ、講師の阿部志郎先生より、「私にとつて人生とは？」愛し愛されてく」と題して、講演をいただき、その後、グループに分かれて話し合いの時を持つ事ができ、交わりの時と学びを深める時を与えられました。

講演では、「子どもは愛されて育つ」こと「愛するとはどのようなことなのか」を、聖書、歴史や社会的背景のお話を通して学び、子ども達との出会いをどれだけ貴重なものとして受け止めているのかということ、これから、いかにその思いを持って歩むべきかを、考

える機会が与えられ、感謝いたします。その中で、ハンセン病の療養所の看護師井深さんの人柄のすばらしさ、患者さんとの関わりには愛があり、「いと小さき者の一人が幸せにならないと社会は幸せにならない」と、マタイによる福音書二十五章四十節の御言葉そのものの方だったことを聴きました。

また、障碍を持ったA君を受け持った担任の先生は、普段は子どもたちがグループでA君の送迎を助けるようにしていた。しかし、この先生は、いつもおぶい紐を持っていて、いざという時に自分が助ける覚悟をしていたという話を通して、私たち保育者は、心の中におぶい紐を持ち続け、いざという時に、どんな時にも、子どもを守るという覚悟が必要だとの思いを新たにしました。

四十周年記念の式典も行なわれました。歴代の部会長先生をご招待したところ、初代部会長でいらつしやる高田彰先生ご夫妻、九期に渡って部会長を務めてくださった金児栄治先生がご出席くださり、感謝申し上げます。久しぶりに神奈川部会夏期講習会へのご出席となつた高田先生からは、現役の先生方には是非読んで欲しいとの思いを込めて、著書である「パンくず」を、出席者全員へプレゼントしていただきました。心より感謝

申し上げます。この本は、「ルツの食卓」(老人会)でお話されたものです。この本を通して、今回のテーマである「命」について多くのことを学ばせて頂きました。今回の夏期講習会で、例年と大きく変わったことは、講演の後、グループに分かれて、話し合いの時を持ったことでしょうか。キリスト教保育に携わる多くの仲間と学びを深めることができ、感謝な時でした。一グループ八名程度で、二十三グループに分かれました。グループの話し合いの内容は、全体での発表がありませんでしたので、ここで、グループごとの話し合いの主な内容を、まとめて簡単に報告させていただきます。

〔講演を聴いての感想〕

- ・ 母親の愛情は絶対ではないが、無条件。保育の愛は、客観的にその時できる愛情表現。よく見る、聴く、触れることが大切だと感じた。
- ・ 愛されることの大切さを改めて実感した。
- ・ 愛された子は愛する子になる、愛されないと愛することができない、ということが心に響いた。
- ・ 虐待を受けた子どもは耳を閉ざしてしまふ。保育者が愛してい

- くことで、その子どもに愛を伝えていくことができるのではないか。
- ・ 心のおぶい紐を持つ、ということが心に残った。そこまで愛して保育しているのかを、考えさせられた。
- ・ 愛情とは、何か。子どもの立場に立つ、本当に愛するということは、言うのは簡単だが難しいと感じた。
- ・ 子ども大切な時期に携わることの喜びを感じた。
- ・ 一人ひとりの子どもとの出会いを大切にしているのか、ということを改めて考えさせられた。
- ・ 日本の子どもたちの夢と、フィリピンの子どもたちの夢の違いから、文化の違いと求めるものの違いを感じた。子どもの抱く夢の違いから、心の豊かさと金銭的な豊かさの違いを感じた。
- ・ 今は、物質的に豊かだが、心が貧しくなっている。昔は、物質的な貧しさ故に、関わりが濃かったのではないか。自分の存在を認められ、タラントを活かせる場もあったのではないか。保育の場で、子どもの持ち味を活かせる場でありたいと思った。
- ・ 物質的貧しい時代に戻ることは難しい。今の子どもたちをどう育て、どう生きていくのか。
- ・ 子どもたちの心の教育、目に見

- えないとどこをどのよう育てていくのかを、もう少し聴きたかった。
- 子どもの夢を大切にしていあげられる幼稚園でありたいと思った。
- 子どもたちの中で何か残るような保育をしていきたいと思った。
- 一歩踏み出す勇氣、「こうだ」と思った時のエネルギーを感じた。
- 戦争のない時に生まれて良かった。しかし、戦争を経験してきた方々がいるからこそ、今の豊かな日本があるのだと感じた。
- 子どもに伝えていきたい。
- 「世界全体の幸福がなければ人間の幸福はない」という言葉から、戦争について、子どもたちと話し合いをすることについて、考えた。
- ハンセン病の療養所での、患者さんと看護師井深さんの関わりに、感じるものがあった。井深さんの「いと小さき者が幸せでなければ社会は幸せにならない」という言葉が印象的だった。
- スウェーデンでは、孤児一人に対して百人のボランティアがいる。この地域での人間関係に驚かされた。
- 里親を経験して、日本でサポートする人が少ない。もっと増えたいと思うが、預かる側にも受け入れる器や事情があるので難しさがある。

- タイの子どもたちは登校拒否がないとの話から。タイには仏教がある。キリスト教も含めて、宗教教育の大切さを感じる。
- いろいろな人を大切にし、障害を持った子どもも平等に受け入れたいと思った。

「講演を受けての話し合い」

- 障害児の受け入れについて。
 - 障害を持つ子どもをクラスの子どもたちが受け入れ、共に育ちあうことができる。
 - ハンディを持った子どもとの関わりで、保育者はゆとりがなく、子どもたちの方がゆとりがあり、学ばされることが多い。
 - 子どもが家で、ハンディを持った子どもを話し、親（の意識を）を変えていくこともある。
 - 障碍のある子どもを理解し受け入れることを大切にしている。
 - 補助の先生が良く見てくれるが、担任との関係が持ちにくいところもある。
 - 障碍を持った子どもの、学校に入ってからの方が心配。小学校との連携のとり方、保護者とのように関係を持つかが課題。
- *キリスト教保育について。
 - 祈りをもって保育していけるこ

- とを感謝している。
- キリスト教という柱があることが、迷った時に支えとなる。
- キリスト教との出会いによって、「ありがとう」と思えることが増えた。みんなに見守られ、支えられていることを毎日感じて過ごせる。

*動物の飼育、虫との関わりについて。

- 虫と遊んでいるが、扱い方をどのように指導していいか、わからない時がある。
- 死んでしまった時の対応が大切だと思う。

*預かり保育について

- 絶対的に必要な訳ではないが、保護者の緊急事態にサポートしあげられることもある。
- 子どものためより、親のためにある感じがして、矛盾を感じる。
- 「子育てするのが楽しい」と思ってもらえるような支援をしたいが、難しい。

- 今回、アンケートをお願いしましたが、多くの方が回答にご協力ください、感謝申し上げます。新しい試みとして行なった講演と分科会という内容について
- 学びを深める事ができてよかったです。

- 他の園の先生と交流することができて良かった。
- 時間が長かった。
- コンサートのの方が良かった。
- とのご意見がありました。「今後、どのようなことを学びたいか」についても、具体的なご意見を、たくさんいただきました。多岐にわたるものです。参加者一人ひとりが神奈川部会を構成するメンバーとして、共に、講習会を作り上げていくという思いで参加することができるよう、願ひ、祈っています。
- 主の御守りと、皆様のご協力に感謝しつつ・・・。



主任 二泊研修会 「保育をデザインする」

場所 マンダリンホテル
参加者 三十一名
担当 秋本一枝

☆デザインという考え方

「保育を計画する」ではなく何故「デザイン」という言葉を使うのか。「計画」という言葉は、「遂行」させることに繋がりが違和感があった。長期の見通しを持ち、子どもの思いに立ち返り、間接的な関わりをするのが「デザイン」。また「計画」というと時間に縛られてしまう。ゆとりを持ちながら逆算して子どもが不都合になつた場で考え、子どもが遊びやすいように「デザイン」をする。

☆保育における様々なデザイン

環境のデザインを考え、子どもの様子を見ながら工夫していく。チームとして環境を工夫して教育をする。環境との出会い方では、短期、長期、偶然、思いと思いのぶつかり合いを生かすことからデザインすることができ。例えばハプニングを生かすということも一つである。目的の検討を含むデザイン（反省的实践）では、目的

自体を問い直すことができる。保育は、一応のねらい、目的を決めるが、本当にこれで良いかと問う直すことができる。この子にとって大切な目的は何かと考え、デザインすることも必要になる。また教師・保護者間・保護者の理解・地域を生かすチームのデザインも必要になってくる。

☆遊びの不思議を生かす

遊びには、幼児期に必要なことがたくさん含まれている。特徴として主体性・楽しさ・友だちとの共感性があり、無理して遊ぶものではない。

☆幼児期という特徴

幼児期は柔らかい時期で、自己肯定感を持てる。みんなと一緒に楽しいという他者との共存の喜び、学びの時期である。児童期の発達期の基盤は、幼児期の「の」のつもり」の時期が基盤となる。

☆保育をデザインする

保育をデザインするということは、子どもの気持ちをもどるようにしたらいかにデザインすることで、保育の計画は一人ひとりに即していかなければならない。

.....
これからも子どもたち一人ひとりを大切にしていこうと思えました。

森上史朗先生の講演より

場所 高座みどり幼稚園
参加者 一〇五名
講演会担当 大漣 知子

去る十一月七日（水）、神奈川県会の第二回講演会が開かれました。各園においては様々な秋の行事等でお忙しい中ではあつたと思われませんが、百名以上の教師たちが集まり、ひととき立ち止まって、自分の保育を振り返る機会をもつことができました。

講師は、現在子どもと保育総合研究所代表の森上史朗先生。このたびは、『今、保育に求められていること——幼児の主体性を育てる保育——』という題のもとに、私たちに非常に多くの示唆を与えてくださいました。その中より、特に私の心に響いた言葉をいくつか挙げさせていただきます。

* 保育を取り巻くものが様々に変わる中でも、変わらないものは子どもの本質。幼児の主体的な活動が今なお大事。（たとえ教師から提案されたものであつても）子どもが気持ちの上で『自分が自分で自分から』もつとやりたいと思えることが大切。

* 『学び』と『学習』は違う。学びとは、試行、探索、追求等により、「ああそうか」と、自分自身の納得が得られること。

* 生きていけば、トラブルや葛藤はあるもの。子どもがそのプロセスの中でおりあいのつけ方を学ぶことが大事。事件を起こす少年の中には、そのプロセスを省略してしまつた子どもが少なくない。

* 『自由保育』という言葉はあえて使わない方が良いと思つている。『自由感』『自発性』を生かした保育が大切。

* 日本人は自尊心や自己価値観が低いが、幼児期に『私の世界』をゆたかにもち、自分のよさに気づき自信をもつことが大事。

* 子どもも保育者も、目が覚めたらかけこみたくなるような園であつてほしい。保育者は、反省的实践家として、保育を子どもと共に創っていく者であつてほしい。

* 「だから幼児保育はやめられない」……森上先生の最後のお言葉でした。

会場となつた高座みどり幼稚園の温かなおもてなしにも、深く感謝します。

神様の創造の恵みを感じる季節、子どもたちと感謝の日々をお過ごしのことと思います。九月二十七日(木)に平塚二葉幼稚園にて役員会が行われましたので、その概要をお知らせいたします。

◆第四十回夏期講習会報告

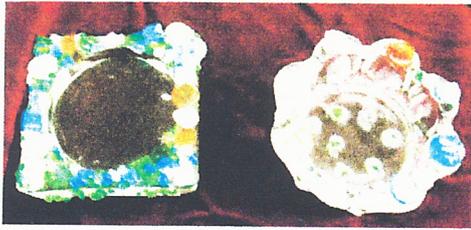
八月二十八日(火)一八七名の参加で行われました。阿部志郎先生の講演を伺い、その後はグループに分かれ話し合いの時間をもちました。各園の様子や課題を聞く等、「幼子をキリストへ」の同じ使命を持つ先生方との交流ができたことは大きな励みとなりました。感想が寄せられました。

◆一泊主任研修会報告

九月七日〜八日にかけてマンダリンホテルにて一泊主任研修会が三十一名(内宿泊は十四名)の参加で行われました。台風の通過に伴い開催が心配されましたが、講師の戸田雅美先生に「保育をデザインする」と題して講演をしていただきました。

◆今後の予定

合同研修会を十一月七日(水)高座教会礼拝堂で森上史郎先生をお迎えして学びを行います。主任研修会を十一月二十二日(木)みくに幼稚園にて行います。



100円のガラスのお皿や灰皿に色ガラスのかけらやおはじきをボンドで接着しました。きれいな小物入れです。(宮の台幼稚園)

プレゼント制作のアイデアいろいろ

もうすぐクリスマス。皆様の園でもクリスマスの装飾、プレゼント作りが始まっている頃だと思えます。他園ではどのようなものを作っているのでしょうか? いくつかご紹介します。



蔓のつるでリースを作りました。赤い実は軽量紙粘土カルモを使用。クリップを付け、絵の具で着色しました。(宮の台幼稚園)



プリンカップに色のろうを入れては乾かし、繰り返して層にしています。クリスマスに火を付けるのが楽しみです。



年少の子どもたちの手型がツリーになっています。雪のクリスマスの様子が素敵です。(← ↑ → 共に平和学園幼稚園)



近年、年長組では一人ひとりの希望に合わせてプレゼントを製作しています。この男の子は枕を作っています。中に綿を入れて縫い合わせています。

編集後記

原稿依頼を快くお引き受けくださった先生方、本当にありがとうございます。各会では担当の先生がお忙しい中、神奈川部会のために労してくださり感謝です。部会だよりを読まれてのご意見等ありましたらお寄せください。

発行日 二〇〇七年十二月五日
発行所 平塚市見附町六一十八
平塚二葉幼稚園 内
キリスト教保育連盟 神奈川部会
編集者 神奈川部会 広報担当



麻の袋を切り、それを利用して羊毛を針で刺してとめていきます。ツリーの飾りには園庭で拾い集めたじゅず玉とドングリをボンドで貼り、タペストリーにしました。(めぐみの子幼稚園)